



教員免許取得のための介護等体験 ～施設での体験から学生が学ぶもの～



介護等体験において、大学生が感じたこと、学んだことを一部抜粋しご紹介します。令和6年度は、県内170施設、553名の大学生が介護等体験を行いました。ご協力ありがとうございました。

●施設の方から学んだこと

→この職ならではのやりがい、魅力、それだけではない苦勞を感じる事ができた。そして、職場での連携の為にも、他の職員と仲を深めたり入居者の方と会話などで交流を図ったりする必要性を学んだ。人と密接にかかわるという方面で、似た職に就こうとしている身として、この学びはこれからも忘れずに常に意識していきたい。

→介護職の大変さを学んだ。そしてそのような中でも、職員全員が助け合い・臨機応変に対応される姿をみて、自分にできることを探す・代わるまた、人を頼る姿勢の重要性を学んだ。この姿勢を大切にして、今後の活動・仕事などで積極的に動くことのできる社会人を目指していきたいと感じた。

→“マンツーマンでの対応”が大切であるという部分を特に学ぶことができた。利用者さんそれぞれが、もちろん趣味も違えば好みも異なる。それに加えてできることにも違いがある。そのできることの最大限をなるべくずっとできるように支えているのだなと感じた。施設の方の1人1人が細かな部分までサポートしている雰囲気が感じ取れた。

→相手を否定しないこと。初めて利用者さんとお会いして、関係が築けていないため、とにかく傾聴することが大切なこと。笑顔で話しかけること。少し大きめなリアクションをとること。とにかく忙しい中でも、利用者さんに目を配り何か異変がないかを確認すること。以上のようなことを実習を通して施設の方から学ぶことができた。

●介護等体験についての感想

→介護等体験中はかなり忙しかった。しかし、教師になるうえで必要なコミュニケーション能力が5日間で磨かれたとも感じる。また、常に周りに目を配ることも意識できるようになった。

→初めは不安ばかりだったが、実習先では児童や生徒の方から積極的に声をかけてくれたことで少し安心した。実習生ではあったが、1人の職員として正規の職員の方たちと一緒に働くことができる貴重な機会だった。介護等体験の実

習先の施設はあまり関わる事が無い種別も多かった。なので、少なからずそれぞれの施設に対する固定概念があったが、その偏見が間違っていたことに気づかされた。今回の実習を通して、学校で生徒と関わる時にはその生徒の家庭環境などの背景を考えながら対応する必要があると感じた。そして、学校と行政とが上手くつながることで、よりよく学校生活を送れるようにしていく必要があると感じた。

→少子高齢化が進んでいる今、この職の需要はどんどん上がると思う。さらに、AI などでは代替不可な部分が多い職と感じた。そして、苦勞する面も多い中で、やりがいをもって仕事をされている職員の方を見て、尊敬の念を抱いた。わが身で体験することができて本当によかった。

●介護等体験を通して気づいた自分の今後の課題

→もっと周りを見て動けるようになろうと思った、1つの仕事に集中して完璧にこなすことももちろん大切だが、それ以上に周りを見て、仕事の優先順位を見定めることが大切だと感じた。そしてそれが自分に一番不足している能力だと感じる。今後は気配りをはじめとした周囲への観察に力を入れることから始めていきたい。

→コミュニケーションをとるのに工夫や技術が必要な方に対して積極的に動くことができなかったなと感じる。人と話すことが好きな私にとって、相手から反応がないという事実になかなか慣れることができなかった。コミュニケーションの技術を磨いていきたいと強く感じた。また、職員の方から教えていただいた方法があるので、また機会をつくって実践してみたいと考えている。



高齢者や障がいのある方とほとんど接する機会のない学生にとって、介護等体験そのものが多様な人々、個性、価値観があることに気づく機会となるだけでなく、高齢者や障がいのある方を身近に感じ社会で共に生きる存在であることを認識する機会となっています。

介護等体験で得た福祉に関する知識や理解は将来に活かせるものであり、体験で出会った方々の姿や事前に持っていた自分の先入観への気づきから、教師にふさわしい人権尊重や道徳観を身につけ、偏見、差別のない社会づくりを生徒に伝える意識が芽生えています。

令和7年度につきましても受入にご協力いただきますようお願い申し上げます。